

Jazz Today®

Monthly Free Magazine

2006.07 No.27



ERIC MIYASHIRO (EM. Band)
SALSA SWINGOZA
quartz-head 01
Fay Claassen





**TIMES SQUARE - LIVE at STB 139 -
エリック ミヤシロ (EM.Band)**

VRCL-11002 (SACD & CD/Hybrid Multi-5ch) ¥3,045 (税込) 2006/06/21 Release

日本を代表するスーパー・トランペッター「エリック ミヤシロ」率いる EM Band 待望の初ライブ・アルバム！
Super Audio CD 層には、サラウンド再生できる 5ch を収録。まるで会場にいるような迫力の臨場感を余す事無く、パッケージ化！

- | | |
|-------------------------|--------------------------------------|
| 01. BLUE BIRDLAND | 【パーソナル】 |
| 02. NO EXIT | エリック ミヤシロ (Tp) |
| 03. KOKOPELLI | 岩瀬 立飛 (dr)、村上 聖 (b)、林 正樹 (pf) |
| 04. KEN'S BAR | 新澤 健一郎 (Key)、西村 浩二 (Tp) |
| 05. STELLA BY STARLIGHT | 木幡 光邦 (Tp)、佐々木 史郎 (Tp)、小林 正弘 (Tp) |
| 06. TIMES SQUARE | 佐久間 勲 (Tp)、中川 英二郎 (Tb)、佐野 聡 (Tb) |
| 07. BASARA | 松本 治 (Tb)、清岡 太郎 (Tb)、山城 純子 (Tb) |
| 08. DANNY BOY | 佐藤 達哉 (Sax)、鈴木 明男 (Sax)、近藤 和彦 (Sax)、 |
| 09. LEFT BANK EXPRESS | 黒葛野 敦司 (Sax)、宮本 大路 (Sax) |
| 10. KICK UP | |
- 2006年2月21・22日 東京・六本木 STB139にて収録

絵本を捲るようなスリルと 贅沢な音世界に酔う。

エリック ミヤシロ (EM.Band) の初ライブ盤

text by 末次安里

明るく、温かく、繊細で、しかも力強い楽団だ。歩を進めたり、心がスキップしたり、背中を押してくれるような音楽だ。夏への扉がひらく瞬間に立ち会ったような、宙を舞う蝶の視覚を体験したような1時間3分55秒だ。キラキラひかり、いきいきと蠢き、いろいろな絵巻が脳裡に浮かんでくるアルバムだ。クロールを掻く手先に音色を与えたような、四季の移り変わりを高速度撮影で観ているような、総勢20名のまぶしい演奏である。

この、どこか入道雲の勇壮ささえ連想させる EM.Band 特有の向日性は、どこに由来するのか。ハワイはホノルル生まれという自分の出自との関連で考えたことはあるだろうか。率直な問いをリーダーのエリック ミヤシロにぶつけてみたら、彼はこう応えた。「それは確かにあるかもしれませんが(笑)。トランペット自体も凄く華やかな面が強い楽器じゃないですか。それを選んだというのも、自

分の頭の中で描いている音楽というのがやはり、そういったキラキラした明るさの部分が強いかからかもしれませんね。なので自分が好んで創る音楽もたぶん、そっちの方向に向いているとは思いますが。性格的にも『暗い』とは一度も云われたことがないし(笑)」

父はプロのトランペッター、母はダンサーにして女優という音楽的好環境で育つ。中学生でプロ活動を始め、高3時にはハワイ代表として全米高校オールスターバンドにも選ばれて、「憧れの」メイナード・ファーガソンと念願の初共演(@カーネギーホール)をした。「ハワイって世界中からいろいろな人種が集まっている所なんです。なので自分の高校にしても本当にさまざまな文化があって、凄くバランスが取れていた。これは面白い言い方なんですけど、皆、お互いを平等に嫌っていたというね(笑)。『やっぱり日本人はさあ…』という偏見もリスペクトも含めての意味ですが、それぞれが「自分たちの文

化は違うんだ」という自覚を持って平等に距離を置いている。ゆえに陰湿さやイジメも全然ないんですね」
そのバランス感覚は自ら主宰する EM.Band での立ち位置にも影響を与えているようだ。
「僕のバンドと聞けばトランペットの高い音や、僕のブレイだけを際立たせるバンドだと思われがちなんですけど、そうではなくて…僕はエリントンのように構成とか曲順とかソリストの順番とか、ひとつのムードや演出を凄く大切にしたいと思うんですね。いわば「献立表を作る」のが好きみたいな(笑)。なので僕がソロを吹いて、そのバッグで皆が演奏をするというバンドではなく、自分もその中に入って演奏するというのが理想形なんです」

バークレー音楽院に在籍中から地元ボストンで活躍し、22歳でバディー・リッチやウディ・ハーマンらのビッグバンドでリードトランペットに抜擢されて、5年間は「スーツケースだけの生活」で世界各国を楽旅する。シナトラ、サミー、ベネット、クインシー、サンボーン、レイ…等々、錚々たるベテラン陣と共演し、89年の来日以降もサザン、ミスチル、YAZAWA、拓郎、五木、明菜、林檎ら、ジャズ畑以外の共演/CD参加作も数知れず。が、決して驕らず。エリックの胸中にはいつも偉大な先輩たちの教えが息づいている。
「中学の頃から「自分は世界一の、ビッグバンドのリードトランペッターになってやる!」という目標は掲げてきたんですが、やはりミスですれば動揺して顔をしかめたり、オドオドするじゃないですか。で、何回

目か公演のあと、バディー・リッチの部屋に呼ばれて云われたんですよ。『お前な、緊張するのも解かるし、たまにはミスもするだろうよ。でもな、お客さんは半分「眼で聴いている」んだよ。音楽は始まれば曲が終わるまで止まらないし、止めちゃいけないものだから、ミスってもああいう素振や表情を絶対にするな。お客さんは(今の曲、少し変わっていたわねえ…)程度にしか思わないもんさ。それと他の者がソロを演じている時はそいつのほうを見て、よそ見や水なんか飲むんじゃないぞ』って。靴は磨いてあるかとか、ステージ前の服装チェックもそれはそれは厳しかった(笑)」



近年は「SWING GIRLS 効果」といわれ、管楽器講師のコマ数が急増したり、ジャズ関連の映画企画が目白押しとも囁かれています。が、ビッグバンド運営の厳しさは変わらない。

「経済的には絶望的というか(苦笑)、いつも赤字ですよ。昔のようにテレビやお店の仕事もないし、必要とされていない。でも、僕らは「リハーサルバンド」と称して、気の合った面子がスタジオを借りて集まり、譜面を配って練習してはコ

ンサートを開くという流れでやっている。今は僕ら以外にもいろいろなビッグバンドが創られてきているし、アレンジャーも多彩な人たちが登場してきている。維持する厳しさは変わらないけれどもある意味、ビッグバンドの歴史にとっては面白い時代が来ているんじゃないかと思えますね」

その志に裏づけされた自信と音色の迫力を是非、SACD (Multi-5ch) で堪能してほしい!

エリック ミヤシロ ライブスケジュール	7/11 アルバム発売記念ライブ STB139 EM.Band
EM.Band の LIVE はエリック ミヤシロがリーダーのバンドになります。	7/21 山下洋輔 プレイズ・ニューヨーク Bunkamura オーチャードホール
	7/22 山下洋輔 プレイズ・ニューヨーク Bunkamura オーチャードホール

ワニも歓喜の、 SALSA SWINGOZA

text by JJazz.net

2枚で燃える、サルサの日本代表イレブン!



パーカショニスト大儀見 元のSALSA SWINGOZA(サルサスウィングサ)。“SWING”+“GOZAR”(スペイン語で楽しむ-enjoy-)のグループ名が示す通り、ダンス・ミュージックが好きなら最高に楽しめるダンスバンド。総勢11人が織り成す強力に太いグルーブとエレガントなメロディに飲み込まれると、まるでNYのスパニッシュ・ハーレムのクラブで、もみくちゃにされながら踊っているような錯覚に襲われる。

新作2枚組ライブアルバム『SWING-OZANDO。“LIVE”at CROCODILE』はそんな至福のSALSA SWING-GOZAのライブを余すこと無くパッケージした作品だ。アフロ・ファンク並みに重心の低いグルーブ・チューンからとろけるようなロマンティックなバラードまで激しくゆさぶりながらエクスタシーの極みへオーディエンスを導いて行く。5/25のモーションブルーヨコハマでのライブでも会場を熱狂の渦に巻き込んだ彼ら。よ

り“DANCE”向きのハコでのライブ(7/10代官山UNIT w/中路英明OBATALA,STAX GROOVE)を控えた大儀見 元と話聞いた。

JJazz.Net: この間、DVDで『Our Latin Thing』(1972年制作。70年代の熱気溢れるNY、スパニッシュ・ハーレムのラティーノたちのライブ・スタイルとファンシア・オールスターズの伝説的ライブを取めた名ドキュメンタリー) 観たんですよ。初め

Salsa Swingoza



て。すごいなって思っ。なんか所謂「ラテン」とか「サルサ」の一般的イメージ、夏、とか「社交ダンス」とか違ってもっとワイルドな感じで。

大儀見: そうそう! もともとサルサにハマったのは『Our Latin Thing』を観たのがきっかけだったんですよ。オルケスタ・デル・ソルのライブの合間に上映したのを観て。「スゲエ!」って思っ。出てくるミュージシャンもこんなでっかいアフロとかだしね。あの映画にも出てたミュージシャンとかに聞くと「あんな歴史的な瞬間はもうないよ。」って言ってたよ。

JJazz.Net: その後、実際NYのラテンの現場に行かれてどんな感じでした?

大儀見: 最初、オルケスタ・デ・ラ・ルスで行ったときは、「ワー!」って感じでラティーノたちに喜んでもらって。彼らもやっぱりマイノリティだから「東洋人が俺たちの音楽を好きで演奏してる。」っていうのが嬉しいっていうのもあるみたいで、お客さん扱いなんだよね。ラテンのフェスティバルでもメンバーひとり一部屋だったし。現地のバンドはコーラスの人と一緒に相部屋なんだけど。でも次に、一人で向こうのコミュニティに入っていた時は向こうのミュージシャンと一緒にあつかい。こんな顔してるし(笑)、あんまり日本人って思われなかったみたい。

やっぱり競争もスゴい。「日本帰ろうと思っ

て」ってボソって言ったら、もういろんなパーカショニストが「そうか! 帰るか! じゃあ代わりにオレをバンドに入れろ。」って(笑)。

JJazz.Net: 大儀見さんは他にもDCPRGとかサルサ以外にも色々やられてますよね。そこでのサルサへのフィードバックとかってありますか?

大儀見: あると思いますよ。確かに現地のパーカッションの人はもうサルサだけだから、僕はラテン以外もやるので少し違うと思います。でも当時サルサしかなくて感じて騒ぎすぎちゃって、ラテンパーカショニストってイメージがつけちゃったけど、もともと米米クラブとか沢田研二さんとかもやってた色々やってたからね。だから今、菊地(成孔)さんのグループとかやってるの意外に思われたりするけど自分としてはごく自然なことなんですよ。

JJazz.Net: SALSA SWINGOZAが何か他のラテンバンドとどこか違う感じがするのはその辺りに理由があるのかなと思っ。よりサウンドがゴツいというかタフな感じがします。

大儀見: 確かにメンバーがそれぞれ、いろいろな音楽やってて、いわゆるサルサマニアじゃないから、サウンドが急に重くならないよね。それにみんな忙しいからスケジュール合わせるのも大変だけど「じゃあ譜面読めるから誰か他の人を代わりに」って感じのバンドじゃないから。そういう風に

やってきてないし。

JJazz.Net: 7/10のUNITでのライブはライブハウスというよりも、クラブという空間ですが、何かいつもと違うテーマとかありますか?

大儀見: いや、特にいつもと変わりなく(笑)。今回のライブは中路英明さんのOBATALAってすごくいいバンドと一緒に。これまたすごく踊れるバンドで。あとジャズで踊るダンスチームのSTAX GROOVE。それとSALSA SWINGOZA。

なかなか生のバンドで踊って機会も少ないと思うので、サルサのステップとか知らなくても、自由に音楽で踊って下さい。NYのサルサのクラブなんかは年取ったカップルがかって良く踊ってたり、でもDJとかはヒップホップとかも一緒にかけるから若いやつもいて自由に踊ってたりとかしますし。

それとSWINGOZAはダンスバンドだけどそれだけじゃないから。じっくり聴く曲もあるし。いろんな風楽しめる。サルサはダンスミュージックだけど唄もすごくいい。メロディもいいですから。



SWINGOZANDO "Live" at CROCODILE / Salsa Swingoza

「ノイローゼだの金のトラブルだの、人間関係のなんたらかんたらなんて、音楽の絶大な力を思い知るために存在する生け贄みたいなもんだ。そういうメッセージが、このアルバムには充ち満ちている。何よりもその事が言いたい。」 菊地成孔(ライナーノーツより)

EWCD-0116 ¥3,000 (tax in) 2006/6/7 Release

Disc-1
01. Oye lo que te conviene
02. No Bebo mas
03. Santa palabra
04. Cocinando
05. When sunny gets blue
06. Amores como tu

Disc-2
01. Los Zapatos
02. La sandunguita
03. Cafe
04. Que manera de quererta
05. You can't do that
06. Azucar
07. Sabor a mi

【パーソネル】
Manny Mendez(vo) / 岩村健二郎(vo, per)
大儀見元(vo, conga) / 前嶋康明(p)
沢田浩史(tb) / 中川祐一(bongo)
Juan Carlos Lopez(timbales)
中路英明(tb) / 宮内岳太郎(tb)
小坂武巳(tb) / 堂本雅樹(btb)

fujiwara, daisuke as quartz head and rebustape

ジャズの壁、 電子の官能。

text by サラーム海上

fujiwara, daisuke as quartz head and rebustape

テクノとアフロとグルーヴと。



ブルーノートからリリースされた Phat 時代からジャズのインプロヴィゼーションとエレクトロニック音楽の融合を探求してきたサククス奏者、藤原大輔。彼のユニット quartz-head の第二作『sen-tence』がリリースされた。quartz-head は電子楽器を用いる場合の名義で、アコースティック・ジャズの場合は藤原大輔トリオとなる。『sen-tence』はその quartz-head の 01 名義。昨年リリースされた同 02 はアンビエント系プロデューサー、ハタケンとのユニット。今回の 01 はケン・イシイらを擁する Reel Musiq から作品をリリースしているテクノ・プロデューサー Rebus Tape とのユニットだ。

『sen-tence』にはエレクトロニック楽器とサククスが正面から対峙するスリリングで時に官能的な時間が刻まれている。ジェフ・ミルズとデトロイト・テクノからの影響が強い黒くファンキーなエレクトロニック・サウンドの上で、藤原のサククスがサンプリング&フィルタリングされ、反復と差異が生まれる。セネガル人パーカッション奏者オマール・ガンデフォールが叩くジャンベによってデトロイト・テクノに内包される無意識のアフロ指向が暴かれる。そして 20 分強の最終曲に至る頃にはサククスやシンセの音がジワジワと脳に染みしてくるのだ。とにかくカッコイイ!

「ずっとジャズをやっていて、メロディやハーモニーの構造とかを必死に勉強していたんです。でも、その頃はデイヴ・ホランドなんかも『もはやジャズで開拓するべき道は残っていない』なんて言うし、理論的には極みに達してしまったような感があった。だけど電子楽器だけは、触っちゃいけないパンドラの箱だった。ジャズの世界では(フェンダー)ローズで止まっている。電気マイルスはあっても、

電子マイルスはないわけ。だけどオレたちが毎日汗水垂らしてスケールやリズムを練習して、知識やスキルを身につけているのに対して、アイツら(テクノ)は『スイッチぼん!』じゃん。許せない! という気持ちがあったよ。でも 97 年頃、ジェフ・ミルズを見て、彼の音楽は電子音楽だけグルーヴしていた。それは、どこぞのジャズ喫茶の片隅で語られるグルーヴのなんたるかとは 100% 違う(笑)。それでオレもと思ったんだ」

そうして試行錯誤の末に編み出したのが、即興的に生成されるテクノ・トラックの上で、サククスの音色をフィルターバンクを用いてリアルタイムで変化させる独自の手法だった。「誰も使っていないものをみんな探していた。そこでデジタル・エフェクトでやってみたり、元に戻して昔のビンテージ機材でやってみたり。ジャズだったら自分の居場所、アドレスをみつけやすいけど、俺がテクノをやることは今の時代どうなのか? と常に不安になっていた。でも、quartz-head02 のアルバムを出せたことでふっきれた。『みんなであの世に行っちゃえば怖くないぜ!』みたいな(笑)。それがこの 10 年やってきて変わった所かな。フィルターバンクを楽器としてコントロールするにはまだまだかきりそう。白状すると、最初はなんだかわからないで使っていたところもあった。でもサククスだって最初はそうだったわけ。サククスはコルトレーンやオレの師匠のジョージ・ガズーンがお手本を示しているから、自分に何が出来てないかははっきりしている。だけどフィルターバンクやエフェクターを積極的に楽器としてコントロールしようとしたのは、歴史をひも解けばテオ・マセロとかビル・ラズウェルとかいるとは思うけど。どこで線を引くかは微妙なわけですよ。

今、作曲って何なのかなんて考えると、カテゴライズ出来ないくらい表現方法が多種にわたっているから」

quartz-head は 01,02 に加え、今後は坪口昌恭との 03、オマール・ガンデフォールとの 05、そして藤原ソロでの 0 を平行して展開していくという。

「この面白さにハマっている。ジャズはアコースティックじゃなければいけないということへの一つの答え方を見つけつつある。今自分の使っている機材、Pro-One というシンセと TR606 っていうリズムマシンをリアルタイムに打って行って、音色をリアルタイムにいじって、サククスを使って音楽を創る。もう新商品もプロトタイプもいない」



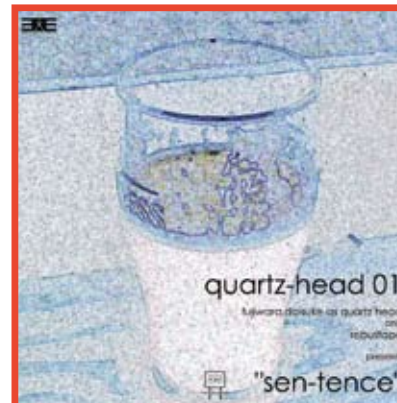
quartz-head con-ver-sation 02 fujiwara, daisuke as quartz head / feat. hata-ken

EWBE-0015 ¥2,300 (税込) 2005/11/10 Release

クォーツヘッド名義で活動する藤原大輔の話題作。今作はアナログシンセ使いのハタケンと共に、シークエンスグルーヴ、テクノに寄ったアプローチで"ジャズ"を逸脱。

01.Obby / 02.Jugs / 03.Sazae
04.Yu-long / 05.Betty / 06.Moya

■パーソネル
fujiwara,daisuke (sax, electronics, syn)
hata, kenichi (syn,electronics, perc)



fujiwara, daisuke as quartz head and rebustape presents 'sen-tence' rebustape "sen-tence" / quartz-head 01

クォーツヘッドこと藤原大輔とドメスティック・テクノシーンの最左翼、リーバステープがインプロヴァイズするニューウェーブ・テックジャズ! アフロ・グルーヴとフィメール・ヴォイスをフィーチャーし、さらにオーガニックな世界観を獲得したシリーズ、第2作!

- | | |
|-------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------|
| 01. afro bleeps now | EWBE-0022 2006/6/21 Release |
| 02. do not open my refrig. | ¥ 2,300 (tax in) |
| 03. people open their eyes to sleep | quartz-head 01 is |
| 04. doubt everything you see 1 | fujiwara, daisuke as quartz head(sax, synthesizer, rhythm machine, electronics) |
| 05. mame bamba pray on the sea | rebustape (digital modular synthesizer) |
| 06. it's coming up to me | |
| 07. the gate is still triggered | featuring : omar guaindefall (djambe, vo) |
| 08. doubt everything you see 2 | as a guest : nonpareille (vo) |
| 09. chief talks what you've got | produced by quartz head |
| 10. what kao keeps in view is the spiritual mechanism | |

ジャズ衰退期にひとり 気を吐く重要レーベル

text by 沼田 順

DIW (その1)

Dream Keeper Charlie Haden and the Liberation Music Orchestra

DIW DIW-844

1.Dream Keeper / 2.Rabo de Nube (Tale of the Tornado)
3.Nkosi Sikelel'i Africa (Anthem of the African National Congress) / 4.Sandino / 5.Spiritual

■パースネル: Tom Harrell (tp, frh) / Earl Gardner (tp) / Ray Anderson (tb) / Sharon Freeman (tr) / Joe Dailey (tuba) / Dewey Redman (ts) / Joe Lovano (ts, fl) / Branford Marsalis (ts) / Ken McIntyre (as) / Juan Lazzaro Mendolas (pan pipe, wood-fl) / Amina Claudine Myers (p) / Mick Goodrick (g) / Charlie Haden (b) / Paul Motian (ds) / Don Alias (perc) / Carla Bley (conductor)
The Oakland Youth Chorus / Elizabeth Min (director)

1990年4月4日、5日、ニューヨーク、クリントン・スタジオにて収録。



80年代初頭。音楽界はアダルトな BGM の最後の録音やアルバート・アイラーの最初期の録音 (Bird Note)、トミー・フラナガンのオリジナル・ジャケ LP ヴァージョン『オーヴァー・シーズ』などを掘り起こし、米国にプロデューサーとして杉山和紀を迎えて、オリジナルの制作をも手掛けるようになる。

と、まあ実に簡潔に書いているが、当時は、もちろん e-メールなんて便利なものはないので交渉や契約書は全てテレックスかエアメールでのやりとり。時間が今の数十倍 (数百倍?) かかる分、作品ひとつひとつへの思い入れは相当なものだったであろうことは想像に難くない。80年代後半からは怒濤のオリジナル制作が続く。ディヴッド・マレイ、アート・アンサンブル・オブ・シカゴを中心に、森山威男、阿部薫らの日本勢、ジョージ・ケイブルス、ハロルド・メイバーン、ラーン・パートンらのいわゆる「黒い」ピアノ作品、ファランクス、ジェイムス・ブラッド・ウルマー、サン・ラといった先鋭アーティストたち。極めつけは菊田の長年の夢であったチャーリー・ヘイデン・リベレイション・ミュージック・オーケストラの新録 (『ドリーム・キーパー』) であった。インパルス盤、ECM 盤『戦死者たちのバラッド』に続く L.M.O. の第三弾が DIW からのリリースであったことは世界のジャズファンにある種の衝撃を与えた。DIW が発足してちょうど 10 年目、1992 年のことであった。

一方 90 年代 DIW の新たなトピックはジョン・ゾーンへの制作への関与が挙げられるだろう。自身の MASADA は全 10 作品を矢継ぎ早にリリース (うち MASADA4 は特典盤だったものを後に正規販売) し、自らのプロデュースで AVANT レーベルを DIW の一部門として立ち上げるまでに至る。ゾーンの様々なプロジェクトから名も知れぬ現代音楽作曲家まで、ゾーンの趣味嗜好が如実に表れた実に画期的なレーベルであった。いわば現在の TZADIK のオリジナルとも言える試みであったのだ。現在のゾーンの影響力を考えると、彼が DIW に残した作品と実績は決して無視することのできない重要なものとなっていることが分かる。

さて、相当に端折って話を進めてきたわけだが、それでも DIW はやはり規定文字数でもあるし、個人的な思い入れはかなり強い。日本のジャズ業界史においては外せない重要なレーベルであるとの認識である。今回は現 DIW 担当者・山本隆 (この男は私の元同僚) に取材した内容を中心に、現在の DIW について書こうと思う。

(文中敬称略・続く)



© NAMI OGATA

Jazz of LIFE

シカゴと夜と音楽と

連載 vol.3

民謡酒場

text by 尾形奈美

私は、シカゴサウスサイドにあるジャズクラブのことを、よく「民謡酒場」と言っている。近所の人たちが集まってきて、音楽のまわりで酔っ払いながらわんやわんやとはしゃいでいる…もちろん私は民謡酒場世代ではないからイメージだけなのだが。

そんな民謡酒場の雰囲気そのままの店が、George Freeman の毎週出演する Tropical Den という店だ。以前、『地球の歩き方』に原稿を書いているベーシストの青木達幸さんにこの店のことを聞かれ、暗黙のうちに「観光客が行くようなところじゃないよな。やっぱり。」ってことでガイドブックに記載されないジャズバーとなった。ジョージは正統派ジャズファンには受け入れがたいギタリストかもしれないが、かのチャーリー・パーカーが単独でシカゴに来た時には、必ずジョージと演奏していたというほどの名手である。そんなジョージの店がなぜガイドブックに載らないかというと、一にまわりの治安が悪い、二にせまい、三に日本人のジャズクラブのイメージからかけ

離れすぎているから、であろう。一度こんなことがあった。ジョージはギター弾きだが、興が乗ってくるとごく稀に歌いだすことがある。ガラガラ声で、うまくはない。が、味がある。ノリもいい。お客さんは大喜び。そのままマイクがカウンターに回ってきたかと思うと、小気味いい演奏に合わせて次々と客のおばちゃんたちがスキヤットを始めた。店内の盛り上がり方は、ロックバンドのライブさながら。酔う姿は宴会余興さながら。しかし、音程や声はともかくとして、その歌がどれも驚くほどグルービーなのだ。マイクが、たいやきくんのごとく客の手元を次々と泳いで行く。おおっ! と感心して見ていると、突然ジョージが、すみっこで首を伸ばして見ている私を見つけて「ヤミー (ジョージは何故か私をこう呼ぶ)、カモン!」と叫んだ。嫌な予感がした。仕方なく客をかきわけジョージの近くまで行くと、いい気分て歌う酔っ払い客からマイクを取り上げ、ジョージが「ヤミ、何か日本語でスキヤットしろ」

と私の耳元にささやいた。予感的の中した。全身の血の気がひく。私はブルースで育ったわけでもなければ、漫談家でもない。だが、嫌だといっても、日本の小娘が歌うぞー! と期待満々で盛り上がる視線の中、逃げられるわけがない。瞬間、理性を捨てた。どうせ日本語の分かる客などいないのだ。握り締めた生温かいマイクに向かって、私は、思いつく日本語を立て続けに叫んだ。そして、私の発した声は、客たちのけたたましく笑う声に一瞬でかき消されてゆくのだ。

もちろん、私の日本語アドリブが惨憺たるものだったことは、説明するまでもない。しかし、それをイチイチ批判するメンタリティーなど、民謡酒場には存在しないのだ。楽しければ結果オーライ、それが彼らの民謡なのだと思った。

■尾形奈美 宮城県仙台出身。写真家。2002年 Chicago Jazz Festival に連動して HotHouse Picture Jazz 展に招待出品以来、シカゴを中心に活動してきた。03年、米国の写真雑誌「Photo Review」の国際写真コンテストにて第3位を受賞。今年2月仙台にて初の個展。



ジャズの未来や楽しさを“曇らせる”ような言説が一部で囁かれている。「いいなあ」「ゴキゲン!」「素敵じゃないか!!」そんな素朴な想いに、ツウの「壁」を打ち立てて何が面白いのだろうか…。

ジャズ音楽堂

連載 4

一方、タジマヤスタカのジャケ画には「ジャズ愛」が溢れている。どんな明晰な評論にも勝り、「コレ、聴きたいなあ」と想わせる筆の力を感じる。降っても晴れても、耳の気持ち「開かれている」からだろう。(編集部) 絵と文 タジマヤスタカ

原田真人→宇崎竜童→矢野沙織→早坂沙知→原田芳雄→

ゲスト
坂田明

コルトレーンが人生を 教えてくれた。

オンキョーのAV試聴室「マリーンシアター」に登場した坂田明さんとの会話は「いいね〜、この大スクリーンでミジンコを見られたら」で始まった。坂田さんのミジンコ好きは有名だが、何でジャズ・メンがミジンコをどうとついで考えてしまうか、これが大間違い。広島大学水産産学部水産学卒業の坂田さんの場合、むしろミジンコの研究者がアルト・サクセスで生計を立てるようになったというのが筋道としては正しい。坂田さんがバッグの中からとり出したのは『コルトレーン・ライブ・イン・ジャパン』。長いベース・ソロから始まる〈クレセント〉をまじりどもせず聞いていた坂田さんに、コルトレーンとの衝撃的な出会いに至るまでの少年時代の話を語っていただいた。



坂田明(さかた・あきら) / サクセス奏者
1945年広島県呉市出身。1969年、東京でグループ「細胞分裂」を結成。1972年、山下洋輔トリオに参加。1979年未だに在籍する。1980年、自己のトリオを結成。以来、様々なグループの結成、解体を繰り返しながら音楽シーンの最前線を目指す。現在のレギュラー・ユニットは「坂田明・mi」と「Yoshi」。また、内外のミュージシャンとの交流も活発で、2005年春には、ジム・オレックとの共同プロジェクトをスタート。CD『およばれ/テトドトキシン』(2005年)、『かなしい/explosion』(2006年)を録音する。また、ミジンコ研究者としても知られ、昨秋、DVD『ミジンコ・静かなる宇宙』を発表したばかり。



中2の時にラジオで『墓に唾をかけろ』という映画の音楽をラジオで聞いて人生変わったんですよ。こ〜いう風になっちゃったの。そのあとですね、アート・レイキーの〈モーニン〉とかファンキー・ジャズが流行るのは。最初に聞いた〈褐色のブルース〉はクール・ジャズ。ヌーベル・ヴァーグの音楽、それがカッコ良かったんです。その頃、僕たちが聞いていたのはくここに幸あれ!だからね、大津美子の。呉の田舎、市電の終点がある村、前が海で後ろが山。とても文化が遅れている場所で暮らしていたんです。本や映画もあったけれど、新しい匂いが流れるのはラジオくらい。色んなものが遅れているわけです、田舎だから。自分の牛の世話の合間に遊んだり食事の用意したり、そんな、のどかな生活にいきなりヌーベル・ヴァーグがぼしっと入って来たんだから凄くカルチャー・ショック。モンゴルの草原で羊と生活している若者が風力発電使ったテレビを見たら、香港のテレビ番組が目に入って、なんだこれは? と驚くくらいのショックだったんです。それで、自分で真空管のアンプを作った。だけど、完成してから考えてみると、アンプだけじゃ音は出ない、プレイヤーやスピーカーが必要だからね。その辺がね、俺の音楽と全く同じで、なにごとにも闇雲なんだよ俺は。細部を考えたり、そつなく順を追うようなことが出

来ない。まず最初にしたいことをやる。一点突破してやりながら考える、それが俺の人生。
50分自転車に乗って山二つ越えたレコード屋で最初に買ったレコードはルドルフ・ゼルキンのベートーベンのピアノ・ソナタ〈月光〉。素晴らしかったね。高校に入ったらブラス・バンドでトランペット吹こうと思っていたわけ。ニニ・ロソとかベルト・ケンプフェルトをラジオで聞いていたからね。
でも、ブラ・バンにはラッパがなかった。先輩は自分の楽器を持っているけれど、うちは貧乏だから買えない。クラブにあったのは、海軍の払い下げで、力いっぱい吹かないと鳴らないぼろぼろのクラリネット。その時に音楽というものは力いっぱいやるもんだというクセがついちゃったかもね。色々なものが歪な形で入ったからこ〜いう人生になっちゃったかなあ。その後、『真夏の夜のジャズ』を見てクラリネットがダサイと思ったので、親戚を拝み倒して金を集めてサクセスを手に入れた。大学は2年留年してサクセスばかり吹いていたし、真夫さんの通信教育でバークレー・メソッドも勉強した。そんな時にコルトレーンが来日したんだ。何が何だか分からなかったけれど、音が凄くて打ちのめされた。音楽をこんなにちゃんとやって生きている人がいるってことに感動した。もっときちんと生きなければいけないということをコルトレーンに教えてもらったんだ。

どうやったらコルトレーンのように生きられるだろうと考えた末、やっぱりミュージシャンになるしかないということにきついたので。だから、仕方なく東京に出て、仕方なくミュージシャンになった。動機が不純かな。追いつめられて、どうしようもなく、やることがないのでミュージシャンになったんだから。歪な人生かもしれないよね。(談) 編集協力:ピンポイント



ナイト・ウォッチ ドン・シックラー

プロデューサー、アレンジャーとしての活動が多いシックラーですがバップおたくの血が騒ぐのでしょうか、時折思い出したようにトランペッターとしてアルバムを出しています。プレイヤーとしての彼は、特に目を見張るような際立った個性があるわけでは無いものの、そつなく綺麗に流れる心地良いメロディラインでストーリーを展開、密かに結構テクニクもあつたりしてちょいとオツなフレーズも難なくこなします。
このアルバムはちょっと大きめの編成になっていて彼のアレンジの手腕もパッチリ発揮されています。

カール・フォンタナ(tb) ラルフ・ムーア(ts)
ボビー・ポーセリ(as) ゲーリー・スミアン(bs)

ピーター・ワシントン(b) ケニー・ワシントン(ds)
リチャード・ワイアンズ(p) 1983年
曲はドーハムの「ナイト・ウォッチ」や「ヒルズ・エッジ」、ウォルター・デイビスJr.の「ロニーズ・ア・ダイナマイト・レディー」、「ウラナス」エルモ・ホープの「ワン・ダウン」、「サムシング・フォー・ケニー」などなど。どれもハードバップ系が好きなら思わずニヤリしてしまうような曲をカッコ良くこぎれいにまとまったアレンジで、って感じで、日本人好みなのかもしれません。そう言えば昔よくマウントFujiのビッグバンドやスーパーブルーなどのデレクションやアレンジ、(およびプレイヤー)で来日していました。



スター・ブライト ディジー・リース

ジャマイカ生まれでイギリス育ち、ブルーノートに誘われて、流れた先はニューヨーク。変わった経歴を持つトランペッターがお送りするもうひとつの「アイル・クロース・マイ・アイズ」。

ディジー・リース(tp)、ハンク・モブレイ(ts)
ウイントン・ケリー(p)、ポール・チェンバース(b)
アート・テイラー(ds) 1959年

この人のプレイスタイルはちょっと変わってますね。基本的にはバップスタイルではあるんだけどメロディの作り方、間の取り方など、ちょっと他とは違う独特なものがあるって、聴いてるこっちが「そう来るか!」と意表を突

かれます。リースを聴く時に油断は禁物!ですよ。その独特の語法は作曲の面にも表れていて、1曲目の「レイク」、よくあるタイプのスローなファンキー調の曲だな、とか思ってた聴き進めると、ゆったりしたテンポの中でのストップ・モーション的な休符の使い方、突如として現れるちょこまかした16分音符の動きなどが面白く効いている謎の展開はやはりフッソーではありません。そしてアドリブに入るとなんかトランペットで喋っているような感じのソロ。キツパリと立ち上がり良く力強い音がきゅっと詰まると思えます。
共演メンバーはN.Y.でのデビュー録音を飾る為にとのえられた豪華な布陣、何も文句はございません。



ホット・レッド 原朋直

日本人のトランペッターの中では……、などという前置きを付けずとも国内外問わず現代のトランペッターの中で好きなプレイヤーの一人です。倍音をたくさん含んだような密度の濃いみっちりとした艶のある音でなめらかによく歌うフレーズ、ゆったりと大きな幅の中でとらえるタイム感が生み出すグルーブ、そしてそれらを支える確かなテクニク。

原朋直(tp)、ジミー・ヒース(ts)
ジョン・ヒックス(p)、レジー・ワークマン(b)、
ジミー・ゴブ(ds) 1996年

このアルバムでは共演者に重鎮たちを迎えています

がキツリ堂々と対等に渡り合ってる感じが頼もしいです。余裕さえ感じられて皆で和やかにセッションを楽しんでいる雰囲気。ヒックスのピアノがセッション全体をイキイキと彩っています。
イントロ無しのにいきなりのバラードに始まり、続くブルースでその人となりを確認し、楽しい様々な語り口の「セプテンバー・イン・ザ・レイン」、懐かしい童謡のような趣きの原オリジナルのしみじみバラード「ブレイン」、さらに「リメンパー」、「フー・キャン・アイ・ターン・トウ」、「ホエア・オア・ホエン」などなどスタンダードを中心に全10曲。最後の1曲に「キャンディ」を持ってくるとこんな楽しい。どの演奏もカッコ良くて暖かい、充実した内容となつちります。いいなあ。

e-onkyo.com
music store

High Difintion Sound HD

秋吉敏子 音楽生活60周年記念企画

オーディオメーカーのONKYOが運営する高品質音楽配信サイト [e-onkyo music store]と日本クラウンの共同企画



指先から鍵盤へ、彼女が込める思いまで聴こえてくるようだ。

こだわりの音質 24bit96kHz で聴く、日本が世界に誇るジャズピアニスト 秋吉敏子の世界

HD高品質音楽配信サイト

e-onkyo music store

http://music.e-onkyo.com/

高品質配信実現のために、レコーディングエンジニア・行方洋一氏によるスペシャルチューン! 今回の配信のために特別にアソートされたベストセレクションを含む13タイトルを順次配信中!



Guitar Renaissance III <翼>
渡辺香津美

EWSA-0125 ¥3,000 (税込) 2006/06/07 Release

アコースティックギターを中心にギターという楽器の可能性を追求する渡辺香津美のライフワーク、「ギター・ルネッサンス」シリーズの第三作が登場！武満徹の楽曲をはじめとする映画音楽にインスパイアされた全13曲の楽曲は斬新なアレンジによって、新しく生まれ変わった！前作とは異なり、スタジオでのレコーディングとなった本作は、吉田美奈子他、シリーズ中初となる豪華ゲスト・ミュージシャンの参加など話題性も十分！シリーズの定番となったバッハの無伴奏チェロ曲、全ギター・ファン感謝のレッド・ツェッペリン「天国の階段」、ジャズスタンダード「チュニジアの夜」、ジブシースタイルの「クレオパトラの夢」、ボサノヴァ風ビートルズナンバー「If I Fell」、そしてラストを飾る日本の古典「月の砂漠」まで、ギターという楽器による表現の可能性を多面的に掘り下げる。更なる洗練と深みを獲得した、渡辺香津美ワールドを堪能できる一枚！SACD/CD Hybrid でリリース！

- 01. 虹の彼方へ (Harold Arlen) / 02. クーラント 無伴奏チェロ組曲第1007番より (J.S. Bach)
- 03. 天国の階段 (Jimmy Page / Robert Plant) / 04. クーラント "FROM HEAVEN" (J.S. Bach)
- 05. 翼 (Toru Takemitsu) / 06. MOMO (Koko Tanikawa) / 07. 星影のステラ (Victor Young)
- 08. シェルプールの雨傘 (Michel Legrand) / 09. IF I FELL (John Lennon, Paul McCartney)
- 10. クレオパトラの夢 (Bud Powell) / 11. アストロ・ジャンプ (Kazumi Watanabe)
- 12. チュニジアの夜 (Dizzy Gillespie, Frank Paparelli) / 13. 月の砂漠 (Suguru Sasaki)

渡辺香津美: guitar / 中牟礼貞則: guitar on tr.7
古部賢一: oboe on tr.8 / 吉田美奈子: vocal on tr.5

うこともあるし、僕もとても好きな歌でもあるし。だから、いかに自分がその曲を「愛せるか」というかな、大事に出来るか。まあ、皆さん、誰もがそう想って演奏なさるでしょうけれども。実際、今回のⅢは共演者もいるということで、そういう人たちと共有してゆくという部分でもそれは言えるだろうし。愉しかったし、助かったし、という部分も多いですよ。

末次: 収録された13曲の選び方は、この順番どおりで出てきたわけではないですよ。今回のアルバムの、生成の流れを教えてくださいませんか？

香津美: 曲順をどう作っていくのかという辺りは割合、「企業秘密的な」側面もあるんですが(笑)。絶対の一つ「筋」としてあったのは毎回、バッハのチェロ組曲の中から一つずつやっていきたいなという決め事なんです。これはやはりどうにも順番どおりにやらなければいけないというのが自分の中でルールとしてあるんで。ただ、僕はクラシックギタリストやクラシック奏者ではないんで、

いわゆるバッハの原典のままにやるというよりは、渡辺香津美の見た「今のバッハ」でいっているし。もちろん、参考にいろいろなチェリストのものを聴いたりしている部分もありますけれども、結局は「やっぱり自分で弾くしかないな」という所へ戻りますので。そのチェロ組曲に関しては1番から、毎アルバムごとに入れていって。正直、いっぺんにやればいいのになあというのもあるんですけども(笑)、なんかそういう自分の中の節目・節目にそうやって続けていくというね。それがこの連作の一つの柱というか、そういうものとしてバッハ・シリーズというのがある。

末次: 吉田美奈子さんと共演した話題の<翼>に関しては、いろいろ聞きたいので次号回しにしましょう(笑)。<シェルプールの雨傘>では古部賢一さん(oboe)と共演なさって。

香津美: <シェルプール>に関しては元々、宮本文昭さんと何年前に演奏した時に「何か一曲、フランスものをオーボエとギターデュオでやろう」ということで僕がアレンジ

した所、自分なりに大変面白く仕上がったので、(いつか盤に残したいな...) と思ってました。で、「翼」という以上、これから羽ばたいてゆくという意味もあるから、今度は「若い世代がそういう自分の音楽とどうコミットしてゆかか」みたいな興味があってね。それでちょくちょく一緒にやる機会のある古部賢一くんやってみた。僕も大変気に入っている奏者だし、彼もいわゆるクラシカルとジャズの即興というものに非常に興味を持っている。その部分をこれから育ててくれるというね。そういう人とこの曲でコラボレーションすることで、またちょっと新しい<シェルプール>になるかなと思っていて。出典は少しレトロな感じの映画ですけども、それがスタンダードになっていく仕組みというか。初めて聴いた若い人はそれこそ、「ここから始まる」というのがあるかもしれない。

(次号に続く)

「音」に始まり、
「音」で終わるのが、理想形。

香津美、待望のギタルネ第3弾を語る。 vol.2

聞き手: 末次安里 (本誌編集長)

前号では『Guitar Renaissance II <夢>』を経て、第3弾のキーワードを<翼>とした内的理由を渡辺香津美自身の口から明かしてもらった。その取材記事のタイトルを「夢から覚めて翼を広げる」とした所以である。では、制作途上の<翼>効果とはいかに!?

末次: 今回は武満徹さんの遺した名曲<翼>の収録も話題を呼んでいます、その言葉を選んだコトでの化学反応みたいなものは香津美さん自身の中で起きましたか？

香津美: これはまあ「隠しテーマ」とかいえばありませんが、武満徹さんの没後10周年だということもあって…自分の中で<翼>という曲に向けてゆく、ひとつのショートストーリー的なものが出来ていて。それに

ついてはアルバムの中に入るライナーノーツに書いたんで、それを読んでもらったほうがいいから取ってここでは語りませんが(笑)。やはり今回は、武満徹さんへの自分のオマージュみたいな気持ちというのは大きいですね。それはありました。

末次: これはインスト奏者の内面性というか、香津美さんの場合で結構なんですが、選曲した作品や歌詞があるカバー曲などはかなり「対話」というか咀嚼作業を行ないますか？

香津美: それを考え出すと切りがないんでね。音楽はもう本当に「音そのもの」で、自分の中で感じたものを表現すればいいと思うほうなんで…ある面で「軽く突き放す」というか(笑)、そういう方向にしたいなとはいつも思ってますね。ですから、この曲をやる

からじっくり山に籠ってとか、滝に打たれてやるとか、そういうのはなるべく避けて(笑)。本当に「音」と向き合った時の自分のフレッシュな感覚というものをいかに出せるか。それこそ本当に「音」に始まり、「音」に終わる、という接し方にしたいなと僕は思ってます。

末次: かの有名な、エリック・ドルフィーの至言を思い出します(笑)。

香津美: そう。「音」に終わって、それで消えて、お仕舞いというふうになるといいんですけども…なかなかね、残るものもあってそれはいいんですけど、歌詞のあるもの、いわゆるテキストのあるもの——とくにそれが日本語であったりする場合だと、よく意味も分かるしね。今回の<翼>なんかは武満さんが御自身でとくにお気に入りだったとい



Guitar Renaissance
渡辺香津美

- 01. 無伴奏チェロ組曲第一番より (プレリュード)
- 02. アクロス・ザ・ユニバース*
- 03. ジャンゴ〜マイナー・スウィング*
- 04. ウェーブ B・A・C・H
- 05. 亡き王女のためのパヴァーヌ*
- 06. サヨナラ / 07. パッシー・ホーム*
- 08. 玉子の時間 - for Takemitsu -
- 09. ワルツ・フォー・デビー / 10. ベーバー・ブルース*
- 11. マイルストーンズ
- 12. セ・トゥ・デラ・ミア・モルテ (貴女が私の死の栄光を)

*5.1ch surround mix を収録

EWSA-0074 ¥3,000 (税込)
2003/2/21 RELEASE

渡辺香津美 (g)



Guitar Renaissance II
渡辺香津美

ギタルネ第2弾は、香津美自身が「とても新鮮な体験だった」と語った、公開録音盤(© 紀尾井ホール)!! 「テクノロジーのアナログ性」! 「今、ここにあることの意味」あるいは「音の記憶」を強く感じさせる超話題作!

- 01. Smile / 02. 無伴奏チェロ組曲より アルマンド
- 03. Three Views of a Secret
- 04. フニーヤ叔父さん〜fool on the hill
- 05. ゴンドラの歌 / 06. Blue Steel
- 07. 旅立ちの秋 / 08. Night & Day
- 09. So What / 10. 夢の森と Agnes Un Reve
- 11. Nuage / 12. Minor Swing (Reinhardt)

EWSA-0106 ¥3,000 (税込)
2005/06/22 RELEASE

渡辺香津美 (g)

織り込まれた先の、「官能」と「豊穡」と。



連載 vol.6

text by 小沼純一



Concert in the Garden Maria Schneider Orchestra

050126-01 / ¥3,665 (税込)

1. Concert in the Garden Three Romances
2. part 1 Choro Dançado
3. part 2 Pas de Deux
4. part 3 Dança Ilusória
5. Bulería, Soleá y Rumba

【パーソネル】
MARIA SCHNEIDER(cond)
RICH PERRY(ts,fl)
DONNY McCASLIN(ts,ss,cl,fl)
TIM RIES(as,ss,cl,fl,alt-fl,b-fl)
SCOTT ROBINSON(bs,fl,cl,bcl,cc)
INGRID JENSEN(tp)
BEN MONDER(g)
FRANK KIMBROUGH(p)
JAY ANDERSON(b)
JEFF BALLARD(cajon)
GARY VERSACE(acc)
LUCIANA SOUZA(vo)
CLARENCE PENN(ds)etc.

CDを聴き始め、すぐ「これはすごい」と思うこともあれば、最初はほとんどなかったのに、何度も聴くうちに「うむ……」と唸りながら良さを見出すこともある。尤も、一回で投げださないというのが、どこかしら引掛かっているともいえるのかもしれない。

さらにもうひとつある。始めから「うん、いいなあ」と思いつつ、二度三度、十回二十回と聴くうちにこれまで見えていなかった、聞こえていなかったものの輪郭があらわになって、それと連動しながら、良さが倍増していく。そんなあり方である。実際には滅多にないことだけれど、もう、知らず知らずのうちに全身に酒が、毒が、あるいは恋の感情がまわってき、というのに似ている。

これは演奏の良さももちろんだが、音楽の、作品の、つまりは「曲」の構成、つくりというところがポイントになっている。この音とこの音が重なり、こう動かされ、といった構造的な視点、音楽のながれを「つくってゆく」手つき、それを構想し、実現する力。だから、聴きとるためには時間がかかるし、少しでも細部が記憶にはいり、何度か聴くうちに照らしあわされて、浮かびあがって、「イメージ」が明確になる必要がある。具体的に言うなら、ジャズだつたら、即興性はかりでなく、「作曲」に重心があるようなもの、ジャズ・オーケストラなどの大所帯の音楽に、感じるどころが多いか。

マリア・シュナイダーの『Concert in the Garden』は2004年録音で、処女作『Evanescence』から数えて5枚目になる。タイトルはメキシコの詩人/外交官であり、ノーベル文学賞を受けたオクタビオ・パスの詩から。11行ほどの詩が英語でブックレットにあるが、後半の四行を引いてみよう——「The world, a double blossom, opens/Sadness of having come/Joy of being here//I walk lost in my own center.」

10分程度の曲が4つに、18分を越える大作がひとつ。計5曲。さりげなく、しかもしつかりと記憶に

残る、親しみやすく、「うん」と聴き手を一回うなずかせるようなメロディから、一呼吸、二呼吸、そうして少しずつ腹筋のあたりが波うつように音楽に身体が添ってゆく。サククスが、ブラス・セクションが加わってゆく。音楽のながれと奏する側、聴く側が、ともに「息」を、さらに「粋」を合わせてゆくには、どうしても八分から十分の大きさは必要になるといふことか。

編成は、通常のビッグバンド編成(5/5/4/4)とラテン・パーカッション、アコーディオンほかのゲストがはいって、作曲とアレンジ、指揮のマリアを含めてミュージシャンは24名。

亡きギル・エヴァンスを手伝いながら、しつかりスコアに書かれた音楽と即興性とを結合したジャズ・オーケストラの色彩感については、しかも何とも美しい音楽をつくりだすに至ったマリア。女性らしい、などという言い方はジェンダー的にも、また批評的にも、文章にするには違和感をおぼえずにはいられないにしても、或る種のデリケートな、じつに行き届いた音色のセンスは強調せずにはすまずわけにはいかない。息のながいメロディがずっと演奏されているうえに数人のソロが重なって、だんだん、だんだんとクレッシェンドし、またもとの静かで切ないテーマに戻ってゆくのを聴いている官能を何と言ったらいいものだろう。たしかに官能なる一言ですますにはあまりに色々なものが混じりあっているのだ——切なさ(刹那さ?)とか喜びとかの感情的なところから、管楽器に息を吹き込み、与えられた譜面を音にしてゆく身体的な感觸、「書き譜」と「即興」の交差する瞬間のズリル、それらが「おなじ」時間と空間に併行しながら「音楽」となりえている不思議、しかもそれが吹き飛んでしまふ、元に戻るけれども、「官能」。

しかも、それまでのアルバムよりラテン性がつくよくなる。パスからタイトルが引かれても、繊細さとタイナリズム、リズムとメロディ、複数の奏でる厚みとソロの交差。マリアの音楽の豊穡さに、いつもながら、感謝。

Fay Claassen



フェイ・クラッセン・シングズ・チェット・ベイカー・Vol.1 フェイ・クラッセン

FNCJ-5515 ¥2,500 (税込) 2006/06/21 Release

アムステルダムのため息。
オランダの美人シンガー、フェイ・クラッセンがハスキーに歌う、
チェット・ベイカー・トリビュート。



01. アイ・フール・イン・ラヴ・トゥー・イージーリー
02. アイ・リメンバー・ユー / 03. マイ・ファニー・ヴァレンタイン
04. レッツ・ゲット・ロスト / 05. ヒー・ワズ・トゥー・グッド・トゥー・ミー
06. ザ・タッチ・オブ・ユア・リップス / 07. ザ・スリル・イズ・ゴーン
08. ルック・フォー・ザ・シルヴァー・ライニング
09. ポートレイト・イン・ブラック・アンド・ホワイート / 10. オールモスト・ブルー
11. コンセプション / ディセプション / 12. プレイム・イット・オン・マイ・ユース

【パーソネル】
フェイ・クラッセン (vo)、ヤン・ヴェッセルス (tp)、カレル・ポエリー (p)
ハイン・ヴァン・デハイン (b,arr)、ジョン・エンゲルス (ds)
2005年7月、アムステルダム、ルロイ・スタジオにて録音。

わたしの中の「彼」を歌い継ぐ。

text by 成田 正

母国オランダでは、すでに安定した人気で活躍するフェイ・クラッセンは、1969年、オランダ東部ヘルダーランド州のネイメーヘン生まれ。キャンディ・ダルファーと同じ年。幼い頃から芸術に関心を寄せるものの、まずはじめはバレエ・アカデミーに入ってダンサーを志した。ステージ映えるしなやかなプロポーションはそのおかげらしい。一念発起して歌の道を目指したのは1989年、20歳で。ハーグの王立音楽院に移ると日一日と才能を開花させ、在学中にデビューを飾っている。

「エラ・フィッツジェラルド、カーメン・マクレエ、シャーリー・ホーンが大好きですが、特別な存在と聞かれば、やっぱりチェット・ベイカーだわ。チェットの歌を初めてラジオで聴いた時、女性の声かと思いました。とても優しいやり方で歌詞に命を与える感じに、とにかく深い感動を覚えたものです」。

デビュー作は、女流サクスのキャロリン・プロイアーとクインテットによる『Simply Be』で、リリースは95年。伸びのある澄んだ声で注目を集め助走路に入ると、99年、アムステルダムで行なわれたチェット・ベイカー記念碑の除幕式で歌う厚遇を受けている。さらに、00年に出したファースト・ソロ・アルバム『With A Song In My Heart』がオランダのエジソン・アワードにノミネイト。すると、翌01年にはアメリカのジャズ教育者協会 (IAJE) から声がかかり、02年にはニューヨークやロサンゼルスで公演。同年のセカンド・アルバム『Rhythms & Rhymes』では、トゥーツ・シールマンスやマイク・スターンと共演するなどして駆け足で階段を駆け上がってきた。

「実は、除幕式で歌ってすぐ、私のところにチェット・トリビュートの話がきたんです。でも、経験不足の私が偉大なチェットと向き合うなんてまだ早過ぎる。何か私なりのいい方法が見えてきてからにしたい、と。好機が訪れたのは04年、チェットの生誕75年になる節目の年でした」。

これには、クラッセンひとりがチェットを私淑してきたことばかりが理由ではない。最晩年のチェットがアムステルダムをこよなく愛し、オ

ランダのミュージシャンとの交流を通して鋭気を取り戻した話は良く知られている。クラッセンをデビューからサポートしてきたベーシストのハイン・ヴァン・デハインと、ドラムスのジョン・エンゲルスが、そのうちの代表的なミュージシャンだった。2度目で最後の日本公演となったコンサートをサポートしたのも、このふたりである。

「デハインはチェットと何回も演奏し録音していて、一緒に日本にも行ってます。彼は私の歌も力量も熟知しているし、非常に優れた音楽家なので、どの歌に何が必要かをちゃんと心得ているんです。ひとつの歌に合う方向性を決めつつ、私たちみんなにちょうどいい自由を残してくれる素晴らしい仕事をしてくれました」。

悪魔と天使と一緒に住み着いたようなチェットの深い翳りと陰影に富んだ表現世界に、30代の女性シンガーが手を触れようとした。まだ誰も聴いたことのないこの大冒険も、さすがオランダでの出来事だったのも手伝って、アルバムもツアーも大反響に包まれているという。向こうでは2枚組の労作だったのも評価の軸になったらしいが、チェットゆかりのナンバーを女性の感性が解釈していくこの試みの成果は、ジャズの遺産をもてなすための大事な手掛かりにもなりそうだ。Vol.2 (8月23日発売) も聴いた者にはますますそう思えてくる。

「でも、決してチェットを真似る道は選びませんでしたよ。なぜなら、チェットはいつだって私の音楽の中にいるんですから。このアルバムでは、そうね、〈オールモスト・ブルー〉と〈ヒー・ウォズ・トゥー・グッド・トゥー・ミー〉が好きだわ。いつでも私をインスパイアしてくれるんです。他の偉大な音楽家たちと同じようにね」。

フェイ・クラッセン、ロブ・ヴァン・バヴェル来日決定!

10月7日(土)、8日(日) 横濱 JAZZ プロムナード
(問) TEL 045-682-2015 横濱 JAZZ プロムナード実行委員会事務局
10月10日(火) フェイ・クラッセン・グループ 東京 BODY & SOUL
10月11日(水) ロブ・ヴァン・バヴェル・トリオ 東京 BODY & SOUL
(問) TEL 03-5466-3348 BODY & SOUL

Text by 前泊 正人 (MOONKS)

中古レコード店に行く人は痴呆になりにくい。



【参考写真】ジャケット写真『Yogi Jazz』Yoki Freund 澤野工房

なんの本で読んだか忘れたが、“よくレジャーをする人は痴呆になりにくいようだ。”と米国の専門誌で発表されたそうだ。

楽観主義者であるぼくは、それを読んで思わずニンマリとしたのを覚えている。レジャーとは、一般的観念からすると旅行やスポーツに代表されるような、アクティブに身体を動かしたりすることだと、なんとなくは理解しているつもり。念のため、辞書をひいてみると Leisure とは、暇。余暇。とあった。まあ、暇な時に積極的に楽しく身体を動かす人との解釈でよいだろう。ぼくは、この年齢になるまで海外旅行は数えるほどしか行ってないし、スポーツといえるものはここ何年もやってないのまったく、該当しない。しかし、ぼくはジャズファンである。ジャズクラブやバーをいくつか知っていて、月に1度はライブを観ながら酒と食事をするが、これは関係ない。ぼくにとってレジャーといえること、

それは中古レコード店まわりだ。

毎日とはいわないまでも、新入荷コーナーをチェックしなければならないという、まともな人間には到底理解できない、自らに課せた使命を着実に遂行する。たとえ残業でヘトヘトに疲れていても、閉店間際のレコード店に駆け込むのだ。この時点で好きなCD

やレコードに囲まれるのだから、レジャー本来の目的である精神の自由は達成されている。また、一步でも早く着けばそれだけ枚数をチェックできるため、走る。階段も一気に駆け上がる。おかげで肺活量と足腰はいくら強化される。コーナーの前に陣取るや否や、昼間とは比較にならない集中力で、わずか1センチに満たないCDブラケの背表紙を、少し離れて色と文字から得られた情報を瞬時に判断する。さらに、LPの場合は最上部約5センチのところを左端、中央、右端と、視点移動回数は秒間約3回。刹那の勝負だ。日々は修練の賜物である。ときに眼球以上に重要な指先の感触。ビニールで覆われているにもかかわらず明らかに違う、滑らかなコーティングの手触り。上品で薄く、すこし小さめ。ほどよい重さ。これら欧州盤独特の感触になった瞬間、指先が硬直するのである。もしかするとレア物かもしれないという、儂い期待を持ちつつ、具体的にどんなのを狙っているのかというと、すでに評価の定まった壁掛けクラスの高級品ではなく、見かけないB級品だ。もちろん、珍しいだけのクズはいらない。内容が伴ってなくては意味がない。しかも、己の経験に裏づけされた評価額と乖離してないこと。そんな特別な盤を発見したりすると、もう英雄になったかのような錯覚に陥り、優越感に浸れる。たとえ、発見がなくても、やり遂げたという

満ち足りた達成感と妙な安堵感は、何にもかえられない。苦労は報われるのだ。この感覚、もはや、スポーツだ。間違っているかもしれないが、ぼくは、これを前向きに“レジャー”として考えたい。だから、

よくレジャーをするぼくは痴呆になりにくいのだ。

そういえば最近、“超”のつくカルトの人気の垂涎盤が、澤野工房からCDで再発された。ヨキ・プロイントの『ヨギ・ジャズ』である。人面コラージュによるジャケット・デザインが、ジャキ・パイアードの、ある作品に似ているのがあって、それと見間違えるたびに卒倒しかける。よく見るとただの後頭部だけで全然違う。いつも自分の愚かさを再認識させられるわけだが…。まあ、たとえホンモノにお目にかかれたとしても、10万円以下は有り得ないので、ぼくに買えるわけがない。負け惜しみじゃなくて、あきらめがつくというか、復刻されて素直にうれしい。ピギナーもベテランも関係なく、だれでも聴けるようになったことが素晴らしい。探す苦労を考えたら、定価なんてタダみたいなもんだ。

おっと、楽しちゃいけない。

Impression of Tristano

転調

第二回



今回はトリストアーノ関連のレコード・CD収集、採譜に没頭し、その音楽をバンドで演奏してみたいと思うようになるまでの話でした。

トリストアーノ研究にのめり込みながらもその頃はまだ、オーネットやカーラ・ブレイの曲、フリーやオリジナル曲など、“若手にありがちな選曲”のバンドをやっていました。そのバンドもそれなりに面白くはあったのですが、しかしどうしてもトリストアーノの音楽をバンドでやりたいという気持ちが抑えられず、その次のライブ（'99年1月）から、ピアノの都築猛と新たにトリストアーノ路線のバンドを始めることになりました。

ベースの海道雄高、ドラムの竹下宗男には前のバンドから引き続き参加してもらいました。海道くん、竹下くんには、それまではこちらからは特に指示は出さず、ただ好きなようにやって下さいと言っていたのですが、「今のバンドは解散。次回からは都築さんを入れてトリストアーノをやるから」と告げられた時は、2人もかなり戸惑ったそうです。

やはり、トリストアーノの音楽にはベース、ドラムはほとんど自由がなく、ひたすらメトロノーム的に4ビートを刻むだけというイメージが強いですから…。

トリストアーノ・ミュージックの特徴の一つは、ソリストとリズム・セクションが、うわべの反応やインタープレイを避け、それぞれが対位的かつ水平的に、同時進行していくところです（以前インタビューさせてもらったトリストアーノの弟子、ユニー・クローザースもそんなことを言っていました）。つまりリズム・セクションにはリズムキーパーとしてだけでなく、ソリストに対するカウンターライン的な役割が求められます。それにはどうしても彼らの技量とセ

ンスが必要だと思っていたので、嫌でも参加して欲しかったのです。その時点では、ピアノの都築猛にはほとんどライブ経験がなかったのですが、そのことは全く心配していませんでした。

都築さん（年上なので）は、国立音大を中退して高瀬アキさんにジャズピアノを習っていたのですが、人前で演奏しだす前に、家業のコンビニ経営（今はやっていない）を継ぐため音楽から離れざるを得なくなりました。ピーク時には3年間1日も休みがないくらい忙しかったが、それでもコンビニの2階にクラビノーバを置いて、合間をみつけては毎日ピアノを練習し続けたそうです。それ

ゆえに都築さんの演奏からは、ジャズを演奏することに賭ける執念のようなものを感じますが、本当に弾きたいことだけに徹底しているブレイには凄みと説得力があります。

そんな訳で、この4人で初のライブを行なったのですが、自分のギターブレイはともかく、バンド全体としては今後も続けていけそうだと感じられました。とにかく都築さんが42歳にして始めて新宿ピットインのステージを踏んだとは思えないほどの堂々としたブレイで、リズム・セクションの2人も驚いていました。しばらくの間はカルテットのみで演奏し続けていたのですが、そのうちに「やはり、サクセスが欲しいな…できれば2人」と思い始めました。まあ、メンバーのつてを頼ればさすが誰か見付かるだろうとタカを括っていたのですが、物事はそううまくはいかなかったのです。（以下次号）



【ひらい・よういち】…ギター奏者／1970年東京生まれ。大学時代に高嶋宏にジャズ・ギターを師事する。キャバレーのハコパンでの修行を経てライブ活動を開始。使用楽器は、オールドのGibson ES-125とシャーウッドギター特製セミアコ・バリトンギター。

LIVE スケジュール

●6/21(水) PM7:30 桜木町 DOLPHY
平井庸一 (G、バリトンG)、都築猛 (P)、増田ひろみ (As)、橋爪亮督 (Ts) 海道雄高 (B)、竹下宗男 (Dr) …レギュラーバンドでの演奏。

●8/18(金) PM2:30 新宿 PIT - INN (昼)
平井庸一 (G、バリトンG)、都築猛 (P)、増田ひろみ (As)、橋爪亮督 (Ts) 蛸子健太郎 (B)、鈴木かおる、竹下宗男 (Dr) …何故ドラムが2台かという違う拍子を同時にやりたいので。

●毎週金曜日 PM7:30
六本木 FIRST STAGE 03-3405-1910
…社会人中心の大人のジャム・セッションです。楽器は全て完備 (Gibson, B ach, King, Selmer 等)。マウスピースはご自分のを持ってきて下さい。

Jazz Today

NEW DISC INDEX

トゥー・ザ・リミット

FAKIE

ダイスレコード DZCD-0015 ¥2,500(税込)
2006/6/28 Release



生一本(きいっほん)ロックン! フェイキーならではの熱い演奏を超高速サンプリングで閉じこめた、1ヒット技術による「録れたて」の音。

01. アクエリアス / 02. グロウ / 03. クローズ・トゥー・ユー
04. トゥー・ザ・リミット / 05. 言の葉 / 06. ザ・ウェイ・ウェイ・ワー (追憶) / 07. ライド・オン・タイム / 08. ピース・オブ・ライフ / 09. 航海 10. あの雲の下まで / 11. サッツ・ザ・ウェイ・イット・ゴーズ / 12. ストレンジャー / 13. 赤とんぼ

FAKIE (フェイキー) : KEICO (Vo.), NAOKI (Nylon Str. Gt.)

ブルー・モンク

エリック・リード・トリオ

M&I Jazz MYCJ-30386 ¥2,800(税込)
2006/6/21 Release



“ブルー&ブルース”はジャズの生命。究極のトリオならではの必聴盤。M&I JAZZ 過去3作品でプロデュースを助めたカール・アレンがドラムスで参加しての新生エリック・リード・トリオ第1作!!

01. BLUE MONK / 02. AM1 BLUE ?
03. BLUE DANIEL / 04. BLUE ROSE
05. BORN TO BE BLUE / 06. BLACK AND BLUE
07. VERY NEAR BLUE / 08. WILD MAN BLUES
09. BLUE AND GREEN / 10. BLUE CHOPSTICKS
11. LIGHT BLUE

Eric Reed (p) / Ron Carter (b) / Carl Allen (ds)

ア・フォーリン・スカイ

倉田大輔

CUG records RKCU-2606 ¥2,500(税込)
2006/6/21 Release



ファッキン・グルーヴ! ニューヨークで活躍中のドラマー倉田大輔。待望の初リーダー作。

01. Evidence (music by Thelonious Monk)
02. A Foreign Sky (music by Daisuke Kurata)
03. Work Song (music by Nat Adderley / Lyrics by Oscar Brown jr.)
04. You (music by Harold Adamson / Walter Donaldson)
05. Isfahan (music by Duke Ellington / Billy Strayhorn)
06. Getsa-Yo (music by Allen Farnham)
07. Skylark (music by Hoagy Carmichael Lyrics by Johnny Mercer)
08. Star Eyes (music by Gene De Paul / Don Raye)
09. Years Gone By (music by Allen Farnham)
10. Three and More (music by Daisuke Kurata)
倉田大輔 (ds) / アレン・ファナム (p)
デニス・アーウィン (b) / ランス・マーフィー (ts)
グラディ・テイト (vo) track 3 & 7

モーツァルト・ジャズ

アaron・ディール・トリオ

Leafage Jazz PCCY-30090 ¥2,100(税込)
2006/6/21 Release



18世紀の天才モーツァルト250歳の誕生日を、21世紀の天才初冠20歳のアaronが、ジャズ・アレンジで祝います!

01. Symphony No.40 in G Minor K.550-1st mov. / 02. Piano Concerto No.21 in C Major K.467 - 2nd mov. / 03. Le Nozze di Figaro K.492 Overture / 04. Andante fur K.616 / 05. Rondo K.511 / 06. Divertimento No.17 K.334 "Menuett" / 07. Serenade No.13 K.525 "Eine Kleine Nachtmusik"-1st mov. / 08. Clarinet Concerto K.622-2nd mov. / 09. Piano Concerto No.23 K.488-2nd mov. / 10. 12 Variations on the French song "Ah vous dirai-je Maman" K.265
11. Piano Concerto No.26 K.537-3rd mov. / 12. Fantasia K.397 / 13. Clarinet Quintet K.581-1st mov. / 14. Symphony No.25 K.183-1st mov. / 15. Ave Verum Corpus K.618

Aaron Diehl Trio:
Aaron Diehl (p) / David Wong (b) / Quincy Davis (ds)

ラ・ソンリサ

田中裕士

M&I MYCJ-30387 ¥3,000(税込)
2006/6/21 Release



独創的ピアニストの逸材、田中裕士のソルビオ・アルバム! リリシズムと静謐美、視覚的な情緒表現が心の琴線に共鳴する!

01. LA SONRISA / 02. SERENATA PARA MAKI / 03. MOON AND SAND / 04. LA ESENCIA DE MUJER / 05. FUENTE Y CAUDAL ~ ESPANA (SPAIN) / 06. A NIGHTINGALE SANG IN BERKELEY SQUARE / 07. HISTORIA DE UNA AMOR / 08. YOU MUST BELIEVE IN SPRING / 09. BLAME IT ON MY YOUTH / 10. ANA MARIA
11. MY FOOLISH HEART / 12. TO MY DEAREST
※ Bonus Track 13. BOULE QUI ROULE ~ 出逢いの星~

Eric Reed (p) / Ron Carter (b) / Carl Allen (ds)

スイータ・スイータ

シャーレーン

ユニバーサルミュージック UICZ-3067 ¥2,000(税込)
2006/5/24 Release



リアーナ、ミリアンに続きクイーン・オブ・カリビアンが登場。キュート&SEXYになれる、この曲で夏が始まる!

01. スイータ・スイータ / 02. アスク・イット / 03. オール・アイズ・オン・ウィー feat. ショーン・ポール & チューパッカ
04. イフ・U・ウォント・マイ feat. チューパッカ / 05. プル・アウト / 06. イントゥ・ミー / 07. ウォッチ・ミー / 08. マイ・ワン / 09. カミン・アウト (ダイアナ・ロス「アイム・カミング・アウト」ネタのダンスホール曲) / 10. リバータッド / 11. ナイス・タイム / 12. イフ・ユー・ウォント・マイ (ソロ・ヴァージョン) / 13. マイ・オー・マイ

SIGNALS

WAYNE KRANTZ

VME VGDWNF-0009 ¥3,150(税込)
2006/7/21 Release



ジャズ・ギター界において進化の最前線を切り開くウェイン・クランツ初リーダーアルバム!!

01. Alliance / 02. Faith In The Process / 03. One Of Two
04. Don't Tell Me / 05. As Is / 06. Signals
07. Sossity/You're a Woman / 08. Music Room
09. Two Of Two / 10. For Susan
11. blues ※
12. reggae ※
※ボーナス・トラック

Don Alias / Jim Beard / Leni Stern / Dennis Chambers
Hiram Bullock / Anthony Jackson

ESPERANCA

宮崎 勝央

スタジオ・サフィール SARJ-6529 ¥2,500(税込)
2006/6/15 Release



宮崎 勝央、待望のセカンド・アルバム発売決定! 「Turista」から3年半ぶりの9曲完全オリジナル、こだわりの最高傑作!

01. Falling star
02. Sweet waltz for two
03. 風に吹かれて
04. Madder red clouds
05. Esperanca
06. Passion flower
07. Sepia photograph
08. Perfect sky
09. For you

MODEST & PROUD

FRAGILE

VME VGVJF-0001 ¥4,200(税込)
2006/7/7 Release



特典映像あり!! 教則的価値あり!! 全曲譜面付

01. Sensitizing
02. Back Skip
03. Fudge & Mudge
04. Phantom Tone
05. Slum Dance
06. Windy Hill Station

Extra
Fudge & Mudge・Phantom Tone各パートマルチアングル映像・副音声による奏法解説・プロフィール

Koichi Yabori (Guitar) / Masatoshi Mizuno (Bass)
Kozo Suganuma (Drums)

Dark Sun Big Rain

Karen Nunis Blackstone

Songbird SONGBIRD-02-2006 ¥2,100(税込)
2006/6/9 Release



アメリカ、ヨーロッパ、東南アジア、日本で高い評価を得るカレン・ヌニス・ブラックストーンの2nd Album、遂に日本発売!!

01. Namahage Blues
02. She's for sale
03. Civilized
04. Oh My World
05. Nasi Campur
06. Such & Such
07. When I Close My Eyes
08. Blow till I Be
09. Temporary Moon
10. Namahage Blues (Nihongo)

MY ROOM

CESARE PICCO

Finger FIN-016 ¥2,500(税込)
2006/6/22 Release



イタリアが生み出した孤高のピアニストが奏でる、メロディアス&グルーヴィな世界!

01. my room / 02. seguimi / 03. neve / 04. castle dance
05. cammino e penso / 06. jacob / 07. coracao vagabundo
08. ottobre / 09. night / 10. karakoum / 11. adagio

internet radio station
JJazz.Net
Japan Jazz Network

無料で聴けます。
抽選でスピーカーやCDプレゼント。

**サンクス3000
キャンペーン**

http://www.jjazz.net/

おかげさまで番組放送300回を迎えることができました。

internet radio station
JJazz.Net
Japan Jazz Network

ライブ音源を放送!

6月新番組「THE JAZZ CLUB」
THE DUET
鈴木勲&中牟礼貞則

・毎週3つの最新プログラムをUP・全12カテゴリー・常時約50プログラム 500曲・月額¥1,050・<http://www.jjazz.net/>

Dreams Around The Corner

杉山 泰

Venus and Mars Inc VM-1002 ¥2,500 (税込)
2006/6/30 Release



フレッシュな感覚で今、欲しいと思うサウンドを追求！
グルーヴ感とハード・ウォームなサウンドが重なり、ジャ
ンルの行き場を選ばないそのレンジの広さは、レベレ・アッ
プした彼の様々な色彩のコンポジションと
うまく溶け合っている。 — ADLIB 編集長 松下佳男

- 01. Keep the faith / 02. Blue sky blue
- 03. Alert / 04. Not for me
- 05. Autumn / 06. January
- 07. Kick off / 08. Angel
- 09. The grace of God

Yasu Sugiyama Piano
Tatsuya Sato Tenor Saxophone
Chris Minh Doky Acoustic Bass
Joel Rosenblatt Drums

WORDLESS

RYOSUKE HASHIZUME GROUP

POLYSTAR JAZZ LIBRARY MTCJ-3031 ¥2,800 (税込)
2006/6/21 Release



静謐と熱情とが交錯する空間。テナーサクソのスーパー
ヴァ・橋爪亮吾の世界が始まる。

- 01. Face
- 02. Seven Four
- 03. Laika
- 04. Cycles
- 05. 不協定の鳥
- 06. Pulse 116
- 07. B.E.
- 08. UT4
- 09. The Mission
- 10. 五月の空はこんなうた

橋爪亮吾 (Tenor Saxophone, Loops) / 市野元彦 (Guitar)
梶原良次 (Fretless Bass) / 橋本学 (Drums)

SMALL COMBO

矢舟テツロー

VOZJAZZ / VOZ Records VOZ-2 ¥1,800 (税込)
2006/6/21 Release



ヒップでユーモラス。お酒場だけで気取らない。
スウィングするシンガーソングライター・矢舟テツローが
展開する”古くて新しいジャズ”。「TEA FOR TWO」に新し
く日本語をつけた「二人お茶でも」等を収録。ペンシド
ラン氏も推薦！

- 01. ハニーチャイは恋の味 / 02. 会いたい人に、会いにゆく
- 03. 心の壁 / 04. 幸せの黄色いリボン / 05. 二人お茶でも / 06. WO
WO NI NI / 07. HONKY TONK PASTA BLUES / 08. ハールに灯とも
る頃 / 09. TRY TO FORGET / 10. L.O-V-E

矢舟テツロー (vo,piano) / 鈴木亮人 (Bass) / 柿澤龍介 (Drums)

ILLUME

Akiko Grace

Jroom COCB-53546 ¥2,940 (税込)
2006/6/21 Release



「静」のアルバム。〜動を選ぶか、静を選ぶか〜「脱ジャズへ」
奇才ビル・ラズウェルのプロデュースによる初のソロ・
アルバム。何処までも心地よい心地よい光のようなアンビ
エント空間に包まれたインテリジェントな音楽！！

- 01. Looking Glass / 02. Light and shadows / 03. Pacific Wind / 04.
Dream / 05. Drift / 06. Departure / 07. Whisper Prayer / 08. Angel
Within / 09. Imagine (ジョン・レノン) / 10. Sakura

アキコグレース

TO THE LITTLE RADIO

HELGE LIEN TRIO

DIW DIW-632 ¥2,625 (税込)
2006/5/26 Release



ピアノトリオの傑作。ヘルゲ・リエンのスタンダード&ジャ
ズ・ナンバー集。溢れ出る旋律美。そして溢れ出る涙。

- 01. グランドファーザーズ・ワルツ / 02. ルック・フォー・ザ・
シムライニング / 03. チェルシー・ブリッジ / 04. リトル・
サンフラワー / 05. ベネロープ / 06. アイダ・ルビノ / 07. ソー
イン・ラブ / 08. ラブ・ソング / 09. アマポーラ / 10. ソノラ
11. トゥー・ザ・リトル・ラジオ

ヘルゲ・リエン (p) / フローデ・バレルグ (b)
クヌート・オーレフィアール (ds)

Radio - Acoustique

Masayasu Tzbooguchi Trio

Flyrec. FLYCD-09 ¥2,400 (税込)
2006/6/5 Release



東京ザヴィスルパッハ、デート・コース・ベンタゴン・ロ
イヤル・ガーデンなどで活躍するピアニスト / コンポー
ザー、坪口昌恭が新たに提示する、アコースティック / エ
レクトロニック・ジャズ・プロジェクト初のアルバムが完
成！ ジャズをベースに、アフロ、ファンク、エレクトロニカ、
レゲエ、アヴァンギャルドなどの要素が交錯する、クール
でスリリングな音楽の誕生。

- 01. Jigzo Ballad / 02. Fujii Drive / 03. Radio Africa / 04. Loop Silent
Radio / 05. Oxidation / 06. Bleu Arbre / 07. Cell Division / 08. Cats
close to Pasta / 09. Poly Rhythm Change / 10. Sprout

坪口昌恭 (Piano, Effect) / 菊地雅晃 (Acoustic Bass, Effect)
藤井信雄 (Drums)
Jan Jelinek / AOKI takamasa / Sora / Dill / バードン木村

ヴィジョンズ (2CD)

ステファノ・ボラーニ&イ・ヴィジョンナリ

VIDEOARTS VACB1005 ¥3,780 (税込)
2006/6/21 Release



DISCA
01. シチリア / 02. 花は咲き、そして散っていく / 03. ヴィズィ
オーネ 1 番 / 04. ダンケルクのカーニバル / 05. ストルタ・ヴァ
06. 雲とはどういふものか

DISCB
01. イントロ / 02. あなたを忘れるために / 03. ヴィズィオーネ
2 番 / 04. 古代都市 / 05. アローン・トゥゲザー / 06. ページめく
り / 07. ねえママ、100 リラちょうだい / 08. 即興 / 09. 死が迎
えに来て / 10. サルティタ / 11. ヴィズィオーネ 3 番

ステファノ・ボラーニ (ピアノ) / ミルコ・グエッリーニ (サクソ)
ニコ・ゴーリ (クラリネット) / フォレルツォ・オスベネッティ (ベース)
クリスチアーノ・カレカニエーレ (ドラムス)
< GUEST >
マータ・フェルドマン (ヴァイオリン) / フロ・プレス (トランペット)
ペトラ・マゴニ (ヴィーカール)

MOMENTUM

Akiko Grace

Jroom COCB-53547 ¥2,940 (税込)
2006/6/21 Release



「動」のアルバム。〜動を選ぶか、静を選ぶか〜「よりジャズに」
エナジー&エレガンス。ライブ・スタイルならではのア
グレッシブな表現に注目！最高のパフォーマンスを演じた
AG トリオ究極ジャズ！！

- 01. Paradoxical Climate * / 02. Night and Day (スタンダード) /
03. Where The Streets Have No Name (U2) / 04. Red Shoes / 赤
い靴 (童謡) / 05. All Blues (スタンダード) / 06. Subliminal
One Oh One * / 07. Dear Old Stockholm (トランドショナル)
08. City Time * / 09. Earth—this beautiful planet * / 10. Departure
soro—from after hours **
(*アキコグレース オリジナル)
(**bonus track)

小山太郎 (ds) / 安カ川大樹 (b)

The live line!

7月の新宿ピットイン

【夜の部】

開場 PM7:30 開演 PM8:00 ¥3,000~ (1DRINK 付)



7月5日(水) 内橋和久 / Hans Reichel DUO

内橋和久 (G, electronics)
ハンス・ライヒェル (Daxophone/G)



内橋和久

7月6日(木) Altered States 「ブラフス」 CD 発売記念
内橋和久 (G, Effects) ナスノミツル (B) 芳垣安洋 (Ds)

7月7日(金) KAO'S SESSION

高橋香織 (Vn) 吉森 信 (Key) 一本茂樹 (B) 仙波清彦 (Ds)
小川美潮 (Vo)
ゲスト: 沼井雅之 (Key, G, Vo)

7月8日(土) ジョージ大塚 NIGHT

ジョージ大塚 (Ds) 深沢真奈美 (P) 高山夏樹 (B)

7月9日(日) 藤井康一ブルース・セッション

藤井康一 (Vo, Ts) 白庭潤 (Ts) 荻原亮 (G) 照本史 (P) 恵福
浩司 (B) 江藤良人 (Ds)

7月10日(月) unbeltipio Trio

前売 ¥3,500 当日 ¥4,000

今堀恒雄 (G) ナスノミツル (B)
佐野康夫 (Ds)



unbeltipio Trio

◎新宿ピットインにて、1/8 よりチケット (予約可) 前売り開始。

7月11日(火) 山下洋輔 ニュー・カルテット ¥4,000

山下洋輔 (P) 柳原旭 (B) 小笠原拓海 (Ds) 米田裕也 (As)

7月12日(水) SoNAISH gut bass duo CD 発売記念

井野信義 (B) 齋藤徹 (B)

7月13日(木) 坪口昌恭 TRIO

坪口昌恭 (P, Effect) 菊地雅晃 (B, Effect)

藤井信雄 (Ds)

■ 浅川マキ・新宿 PIT INN 3DAYS-2006-定期公演 ■

前売: ¥4,500 当日: ¥5,000

7月14日(金)

ゲスト: 向井滋春 (Tb, Cello)

加藤真一 (B) セシル・モンロー (Ds)

7月15日(土)

ゲスト: 向井滋春 (Tb, Cello) 加藤真一 (B) セシル・モンロー (Ds)

7月16日(日)

ゲスト: 向井滋春 (Tb, Cello) 加藤真一 (B) セシル・モンロー (Ds)

◎新宿ピットイン、チケットびあにて、チケット前売り中。

7月17日(月) 橋爪亮吾 グループ

「WORDLESS」CD 発売記念

橋爪亮吾 (Ts, Loops) 市野元彦 (G) 梶原良次 (B) 橋本学 (Ds)

7月18日(火) コルトレーンナイト 2006

高橋知己 (Ts) 竹内直 (Ts, Bd, Fl) 安原将生 (P) 矢野克宏 (B)

石田博嗣 (Ds)

7月19日(水) 大友良英 × 中村達也 ¥4,000

大友良英 (G, Electronics) 中村達也 from Losalios (Ds)

◎新宿ピットイン、チケットびあにて、6/3 より前売り開始。

SHINJUKU PIT INN

〒 160-0022
2-12-4 ACCORD BLDG. B1
Shinjuku shinjuku-ku Tokyo JAPAN
☎ 03-3354-2024
http://www.pit-inn.com

7月20日(木) 今村祐司 GROUP
今村祐司 (Per) 峰厚介 (Ts) 加藤崇之 (G) 渋谷毅 (P, Or) 小
泉P 亮人 (B) 橋本卓司 (Ds)

7月21日(金) 田中信正 KARTELL
田中信正 (P) 山田晃路 (B) 大槻 "Karta" 英宣 (Ds) ゲスト:
神田佳子 (Per)

7月22日(土) 幸島文雄 NIGHT

幸島文雄 (P) 生沼邦夫 (B) 船野智之 (Ds)

7月23日(日) BOZO

津上研太 (As) 南博 (P) 水谷浩章 (B)
外山明 (Ds)



BOZO

7月24日(月) Minga

早坂紗知 (Sax) 小畑和彦 (G) 永田利樹 (B) コスマス・カピツ
ツァ (Per) アドゥ・バイファル (dance, vo, djembe) ゲスト:
北原雅彦 (Tb)

7月25日(火) 榎本秀一カルテット

榎本秀一 (Ts, Fl, F) 藤澤由二 (P) 伊藤啓太 (B) 上村計一郎 (Ds)

7月26日(水) 渋谷毅 エッセンシャル・エリントン ¥3,500
渋谷毅 (P) 峰厚介 (Ts) 松風鮎一 (Sax, Fl) 関島岳郎 (Tuba)
外山明 (Ds)
ゲスト: 清水秀子 (Vo)

7月27日(木) ラクダカルテット
水上聡 (Key) 林栄一、菊地成礼、佐藤帆 (Sax) 類家心平 (Tp)
今堀恒雄 (G)

水谷浩章 (B) 外山明 (Ds) 向山テツ (Ds) 中村敬 (Vo)

7月12日(水) SoNAISH gut bass duo CD 発売記念

井野信義 (B) 齋藤徹 (B)

■ George Colligan Trio featuring Mark Turner & Tony Lakatos ■

前売: ¥6,000 当日: ¥6,500

7月28日(金)

ジョージ・コリガン (P)

マーク・ターナー (Ts)

トニー・ラカトシュ (Ts)

ピセンテ・アーチャー (B) EJ・ストリックランド (Ds)

7月29日(土) ジョージ・コリガン (P) マーク・ターナー (Ts)

トニー・ラカトシュ (Ts) ピセンテ・アーチャー (B)

EJ・ストリックランド (Ds)

◎新宿ピットインにて、6/3 よりチケット (予約可) 前売り開始。

7月30日(日) J.B.C. Bassist Festival 2006

開場 15:30 開演 16:00 21:00 終演予定 ¥3,500

◎新宿ピットインにて、6/3 よりチケット (予約可) 前売り開始。

7月31日(月) Hironobu Saito ニューヨーク クインテット

前売: ¥4,000 当日: ¥4,500

西藤大信 (G) ドミニク・ファリナッチ (Tp) ミルトン・フレッ
チャー (P) 中村恭士 (B)

ディオン・ヘアーストン (Ds)

◎新宿ピットインにて、6/3 よりチケット (予約可) 前売り開始。



INFORMATION

中村健吾 2006年7月・8月ツアースケジュール

No Name Hooses directed by 小曾根真
 07/25 (火) 日立ビッグセンター (間) 0294-24-7755
 07/29 (土) 倶知安ジャズフェスティバル (間) 0136-23-2929
 07/30 (日) ヨコスカジャズドリーム2006 (間) 046-823-9999

中村健吾 & 海野雅成 Duo

08/01 (火) 古河/Up's
 08/02 (水) 四日市/ムーンシェ
 08/03 (木) 京都/RAG
 08/04 (金) 神戸/サテンドール
 08/05 (土) 大阪/Mr.ケリーズ
 08/06 (日) 名古屋/Lovey
 08/07 (月) 本厚木/Cabin
 08/08 (火) 浜松/ハーミットドルフィン
 08/09 (水) 静岡/Koln
 08/10 (木) 東京/Alfie

(間) 55 RECORDS 03-5785-2357



T-SQUARE Concert Tour 2006 "BLOOD MUSIC"

■ T-SQUARE 新作『BLOOD MUSIC』を引っさげ、全国ツアースタート!

4月に発売になった新作『BLOOD MUSIC』の楽曲をメインに、老若男女問わず楽しめる内容に。新作で新たな一面「ロック」を魅せた T-SQUARE のツアーはまだ始まったばかり。

■ 残りの日程

06/23 (金) 福岡 イムズホール
 06/24 (土) 熊本 バトルステージ
 06/25 (日) 長崎 DRUM Be-7
 07/02 (日) 東京 メルパルクホール
 07/08 (土) 韓国 世宗文化会館

■ HP www.tsquare.jp



Jroom night summer 2006

若手注目アーティストを次々と輩出して来た話題のレーベル Jroom が、選りすぐりのラインナップで送る「Jroom Night」が久々の開催!!

1夜 7月19日
 Jroom Night Summer 2006 1st Night

若手注目アーティストを次々と輩出して来た話題のレーベル Jroom が、選りすぐりのラインナップでお送りする「Jroom Night」が久々の開催となりました。今回は1晩3組のアーティストをじっくりとお楽しみいただける企画ですが、初日は「teens night」。デビュー前のお披露目とも言える若手18歳のピアニスト松本茜を筆頭に、若手女性 SAX 奏者として圧倒的人気を築きつつある矢野沙織、そして昨年衝撃のデビューを飾った在米で日中ハーフのピアニスト YUMA、日本の JAZZ 界の若手ホープ3人が集結する Jroom Night 初日は注目度抜群、必見です!

出演: 矢野沙織カルテット、YUMA トリオ、松本茜トリオ
 19時半開演 6000円

2夜 7月20日
 Jroom Night Summer 2006 2nd Night

Jroom Night Summer 2006 の二日目は、人気、実力共にすっかり定着した Jroom 看板アーティストとも言うべき2人の登場です。明確なテーマ性のあるアルバムを発表し続け、そしてこの夏アグレッシブなライブ・アルバムと、独自のアンビエント・ミュージックと言う正反対とも言える2枚の作品を同時発売で、さらにその存在感を強くアピールするアキコ・グレース、コケティッシュなキャラと落ち着いた歌声で、日本だけでなく上海でもブレイク(!)の MAYA をお楽しみいただけます。オープニング・アクトは津軽三味線でジャズる、ミニ・スカ三味線こと、はなわちえ。

出演: アキコ・グレース・トリオ、MAYA コレツツ、はなわちえ
 19時半開演 6000円

SWEETBASIL STB139 〒106-0032 東京都港区六本木6-7-11
 tel: 03-5474-1395 E-mail: herb@stb139.co.jp



■カルテット■
 矢野沙織(アルト・サクソ)
 今泉正明 (p) 増原巖 (b)
 安藤正則 (ds)

■トリオ■
 YUMA (ユーマ)
 早川哲也 (b) 藤井撰 (ds)

■トリオ■
 松本茜 (ピアノ)
 上村信 (b) 池長一美 (ds)

■トリオ■
 アキコ・グレース (ピアノ)
 安川大樹 (b) 小山太郎 (ds)

■ヴォーカル+クインテット■
 MAYA (マヤ) (ヴォーカル)
 森りこ (vln) 池田雅明 (tp)
 寺村容子 (p) 島田憲二 (b)
 松尾明 (ds)

■カルテット■
 はなわちえ (津軽三味線)
 上村信 (b) 池長一美 (ds)

Tom Grant Smooth Jazz Concert

全米 No.1 スムースジャズ ピアニスト トム・グラント 初来日コンサート決定!

アメリカのビルボード「スムースジャズ・チャート」で幾度も No.1 セールスを獲得したトム・グラントが、7月16日(日)大阪 池田市民文化会館アゼリアホールにて初来日コンサートを開催します。当日はスペシャルゲストとして朝比奈 隆子も出演!そしてチケットをご購入のお客様には、ご来場時にトム・グラントの日本限定リリースニューアルバムをプレゼントします!!

〈トム・グラント スムース ジャズ コンサート/スペシャルゲスト 朝比奈 隆子〉

日時: 2006年7月16日(日)

開場 18:00 開演 19:00

会場: 池田市民文化会館アゼリアホール

前売 5,000円(当日6,000円) 前売ペア9,000円 全自由席

※未就学児の入場はご遠慮ください。

◎チケットはローソンチケット他にて発売中。

<http://www.azaleanet.or.jp/grant/>



山本精一・勝井祐二 (ROVO) プロデュース アルゼンチン音響派スペシャル・ユニット ジャパン・ツアー 2006

- 7/1 (土) 東京 浅草アサヒ・アートスクエア (ゲスト: UA)
- 7/2 (日) 大阪 Bridge (ゲスト: 内橋和久 OORUTAICHI, YAMANO, 亀井奈穂子, 千住宗臣)
- 7/3 (月) 広島 クラブクアトロ
- 7/5 (水) 京都 磔磔
- 7/6 (木) 名古屋 TOKUZO
- 7/7 (金) 東京 キネマ倶楽部

act: ROVO + アルゼンチン音響派スペシャルユニット
 19:00 開場 / 20:00 開演 前売 ¥5,000 / 当日 ¥5,500

問: プランクトン (03-3498-2881) <http://plankton.co.jp/>

響きあう、遠い国の、近しい音楽。



IZUMI - Buenos Aires Session Vol. #2

EWCD-2012 ¥2,500(税込)

1. Micro Takes 2 / No.1
2. Take 1
3. Before Pizza

Produced by Katsui Yuji, Yamamoto Seiichi, Fernando Kabusacki

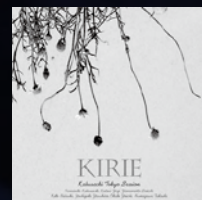


Chichipio - Buenos Aires Session Vol. #1

Mono Fontana, Fernando Kabusacki, Alejandro Franov, Santiago Vasquez meets, Yamamoto Seiichi, Katsui Yuji
 EWCD-2011 ¥2,500(税込) 2005/12/14 RELEASE

1. El Trio Chichipio / 2. After Pizza 3 / 3. Micro Takes 1 / No.2
4. Micro Takes 2 / No.3 / 5. Micro Takes 1 / No.1 / 6. Friday 2
7. Friday 3 - No.4

Mono Fontana (syn.), Fernando Kabusacki (g, ukulele, programming), Alejandro Franov (keys, paraguayan harp, p, sitar, accordion, voice), Santiago Vasquez (perc.), 山本精一 (g), 勝井祐二 (vln)



KIRIE / Kabusacki Tokyo Session

EWGL-0005 ¥2,500(税込) 2004/10/10 RELEASE

アルゼンチンの新しい音楽シーンの中心人物、フェルナンド・カブサッキと、現在の日本を代表する即興演奏家たちが紡ぐ新たな物語「KIRIE」。

produced by 勝井祐二
 01. El orador y la Diosa de la Oscuridad / 02. El sueño de Kit / 03. Milton
 04. Strawberry Bridge: la belleza de las gavillas doradas / 05. El octavo día
 ■メンバー
 Fernando Kabusacki (g, sampler) 勝井祐二 (vln) / 山本精一 (g) / 鬼怒無月 (g)
 秀理安洋 (ds) / 岡部洋一 (ds) / 沼澤尚 (ds)

◎JazzToday(Radio edition)...

衛星デジタルラジオ放送局「MUSIC BIRD」でいきなり2時間枠の番組ナビゲーターを担当するコトになった。既に2回ぶんを収録し、7月8日から隔週土曜日22時~0時(翌週の再放送が各1回)のOA。一回目は創刊以来の本誌縁の曲をかけては独り喋りで終始し、二回目はイケメン奏者の太田剣(as)をゲストに迎えて楽しいひとときを過ごした。今後は毎回ゲストを招いての新作秘話や本誌選曲の新譜などを紹介。台本は一切なしの「雑誌編集テイスト」で、活字では伝えきれない音楽の魅力やジャズメンの人柄を電波で届けてゆく所存だ。毎回の詳細は随時誌面上で告知するつもりだが、珈琲ブレイクの際にはNILS LANDGRENの<Speak Low>なんてオレオレ曲も...



□山川直人著『コーヒーもう一杯』(エンターブレイン刊)...

珈琲といえばこの、ディランの曲名に因んだコミック本との出遭いが最近の個人的ヒット。六本木の書店で音楽本を買うためにレジに並んだ際、推薦POP付で置かれていた幅広の帯面にたちまち魅せられて即ゲット!! 帰りの電車内で読みきってしまったが、乗り換えでメトロの階段を昇るやその足が迷わず、喫茶店(らしい喫茶店)を探して歩を進めたコトは云ふまでもない。いずれも珈琲をめぐるアロマ香る掌品が満載。古本ネタも散見し、幕間の小文にこんな記述を見つけて苦笑した。「私の父は/キャッチボールもしてくれない父親だったが/散歩には連れていってくれた。散歩の目的は本屋で、/そこで父は本を買い/私にも自分で選ばせてくれた。」



□喜国雅彦著『本棚探偵の冒険』(双葉社刊)...

古本といえばそうそう、今どき筆者羨望の函入り本である本書を(いかにも昔ながらの古本屋で)1,000円でも美本ゲットするといふ幸運に遭遇した。この内容と装丁だから定価(本体)2,500円は決して躊躇するような金額ではなかったが、(あるいは漫画本をほとんど読まない編集子にとって喜国雅彦は江口寿史&石井隆と並ぶ例外的存在だが)この本ばかりはいつか古本で...と固く(チョット嘘)、心に決めていた。ジャズと古本と珈琲と。って結局、じぶんは嗜好品も行動規範もまるで大学時代と変わっていないわけでトホホとは全然思わないが、実に何とも安上がりであるな。

□菅原昭二著『ジャズ喫茶「ベイシー」の選択~ぼくとジムランの酒とバラの日々』(講談社刊)...

さらに古本といえばそうそう、最近では「親本」(しかも極美本)の扱いといふか古書価が総じて安く感じられるのはやはりBOOK OFF効果の現われであろうか。5月に一関ベイシーを訪れて以来、講談社プラスアルファ文庫版ではなくて是非、親本を所蔵しておきたいと思った矢先に本書をゲット!! 「リー・モーガンのトランペットが特に良かった。つばきが飛んできた。」や「たくさん持っていた趣味はほとんど棄てた。自分のいいたいことは全部スピーカーにいわせることにした。」あるいは「ぼくは『シマッタ!』と思った。何たることか。音は<嗅ぐ>ものだったのだ!!」といふ菅原節に数年ぶりに酔いしれた。



□菅原正二著『聴く鏡 一九九四-二〇〇六』(ステレオサウンド刊)...

菅原節といえば、「一九八八-一九九二」版に当たる前掲書に次ぐ待望の新刊が晴れて(?)執筆本拠地であるステレオサウンド社から出た。その間「昭二」から「正二」へと変身した氏の家庭の事情は知らないが一読後、この人はやはり哲学を軽妙に語るコトの出来る稀有な随筆家だと思った。文字どおりの全身音響家ではあるが、本書の頁を任意に捲ってもシビれる至言があちらこちらに散りばめられている。「スリコギなどもであるが、ふるさとの山に向かって『云ふ』ことはあっても、これらの偉大なる「旧態依然」に向かっていべきことは今さら何もない。/— 諦めが肝心、というよりは『諦めが完成』なのダ、と気がつく。」、凄。「いつもは会っていないけども、いつも想っている人がいる。」、吊辞の達人でもあるだろう。「いい『針』一本見つからない腹いせに何人も人類滅亡までいうのは少しオーバーだが、いかに巨大なものでもガラガラとくずれるときは『針の一穴から』というではないか!」、練りに練った仕掛けといふよりはおそらく身体の経験値や細胞の記憶がふっと書かせる軽妙洒脱さなんだろうと想ふ。「夜中に台所で僕は君に話しかけたかった」とタイトルしたり、<世間知らず>の第一行目を「自分のつまさきがいやに速くに見える」と書き出せる谷川俊太郎の天才にも通じるプロの文藝だと想ふ。菅原正二も尽きるところ、いま生きているといふコトを書いているのだ。「あの時、モノが自分を見つけてくれたのか...と。」、深い!